
総 説

人間科学の再構築Ⅲ

－人間科学的コラボレーションの方法論と人間科学の哲学－

西 條 剛 央*

要 約

本研究の目的は、人間科学の危機を克服するために、人間科学におけるコラボレーションの方法論を検討し、またそれを通して人間科学の哲学の意義を再考することであった。最初に、これまでの人間科学の問題点を短くレビューした。第二に、最近の人間科学の進展についてレビューした。第三に、人間科学におけるコラボレーションの方法論を提起した。第四に、そのコラボレーションの問題点が指摘された。第五に、人間科学におけるコラボレーションを可能とするために適した認識論的基盤について議論された。第六に、人間科学の知識を体系化するための基盤が提起された。最後に、人間科学における哲学の意義が論じられた。

キー・ワード：人間科学の哲学、構造構成主義、トライアンギュレーション、学融、アナロジーに基づく一般化、コラボレーションの方法論

「なにも釈明するな。なにも消すな。あるがままを見て、語れ。一きみには事実を新しく照らしだすものが、見えるはずだ。」(Wittgenstein, 1977/1995)

1. 問 題

1-1. 人間科学の危機的状況

人間科学は、これまでの専門化・細分化に突き進んできた個別科学の限界と反省から、人間存在を総合的に理解する科学が求められた結果、生まれてきた。言い換えれば、本来「人間のための」科学であるはずが、「カガクのための科学」になっているとの反省から生まれた学問といえよう。そうした理念のもとに、各地で人間科学に関連する学部や学科、大学院が設立された(鈴木, 1996)。

木, 1996)。

しかし、「人間科学って何だろうか…？」といった基本的な疑問に十分な回答を与えることができずにいる現状に、人間科学に携わる我々も薄々とは気付いているのではないだろうか？

何のための人間科学なのだろうか？ 人間科学に意義はあるのだろうか？ 自分のやっていることは人間科学なのだろうか？ そうだとしたらどういう意味において人間科学なのだろうか？ 単なる学問の寄せ集めである「束論」(鈴木, 1988) とどのように違うのだろうか？

*早稲田大学大学院人間科学研究科博士後期課程 日本学術振興会特別研究員

西條 (2003b) は、『ヒューマンサイエンス』に掲載されていたシリーズ「人間科学を考える」に対して数量的分析を行うことによって、「人間科学について考えなくなっている」ことを統計的に確認した。

1988年の創刊時から1991年までの4年間は、いずれも15ページ以上の掲載ページがあったが、徐々に減少していき、1999年からはまったくみられなくなり、事実上このシリーズは消失していたのである。このことに顕著に現れているように、創立から16年以上が経過し、新たな世紀に足を踏み入れた現在も、全体性を謳う本来の人間科学観を体現するに至れず、人間科学は自らのアイデンティティを確立できずにいるといえよう (西條, 2002b)。

我々はこのような問題を、延々と見て見ぬ振りをしてやり過ごすだけでいいのだろうか？あるいは、答えがでないものとして諦めるべきなのだろうか？

人間科学が、このような閉塞的・危機的状況を打開できずにいれば、人間科学に携わる我々のみならず、一般の人々の人間科学に対する信頼が深刻な危機に陥るのも時間の問題であろう (西條, 2002b, 2003b)。

1-2. 近年の人間科学論の展開

この危機的状況を打開すべく、最近になってようやく人間科学に進展がみられた。菅村と春木 (2001) は「ポストモダニズムという思潮が顕在化してきたことを皮切りに、モダニズムと混淆している今日の人間科学について、メタのレベルから読み解き、今後の議論の方向性について示唆を与える」論考により、人間科学の進むべき道標を示した⁽¹⁾。

西條 (2002b) は、それを継承する形で、客観主義に代表されるモダニズム的認識論と、社会構築主義や構成主義に代表されるポストモダニズム的認識論を包括する超認識論を制定し、人間科学の依拠すべき認識論的基盤を整備した。

またその上で、ダイナミックシステムズアプローチ (Smith & Thelen, 1993 ; Thelen &

Smith, 1994, 1998) と縦断研究法 (西條, 2001)、科学的ナラティブアプローチ (西條, 2002a, 2002b, 2003a)、カオス時系列解析 (鈴木, 2001, 2002a, 2002b)、といった人間的事象を全体としてコード化する人間科学的方法論を具体的研究例として示した。

また、西條 (2003b) は、シリーズ人間科学考に対する質的分析を通じて、「人間科学の考え方」を再考した結果、従来の人間科学考は、それぞれの内容は興味深いものの、人間科学考としては適切な「考え方」をしていなかったため、全体として建設的に展開していないことを示した。

さらに、西條 (2003b) は、ほとんどの人間科学考が、さまざまな考え方を自由に公表してはいるものの、先行の人間科学考を引用した上で議論しておらず、先行人間科学考を踏まえた「討論する場」にはほとんどなっていないことを示した。すなわち、従来の人間科学考においては、研究者間のコラボレーションは体現されていないのである。

人間科学の特徴は、その掲げるシンボルの包容性により、様々な学問領域・立場が入り交じっている「学問のるつぼ」的側面にあるといえよう。この特徴を活かすことができずに混迷・混乱を招くに終わってしまうか、あるいはこの特徴を「特長」へと変え、人間科学ならではの成果を産出することができるかは、人間科学の存在意義に関わる重要な問題といえよう。したがって、本稿では「人間科学的コラボレーションの方法論」に焦点化して論じてみたい。

2. 目 的

本稿の目的は、様々な人間科学的コラボレーションの方法を論じることにある。また、それらのコラボレーションに適切な認識論的基盤についても議論した上で、人間科学的知の体系化に向けた理論化を進める。またそれらを通じて人間科学の意義について再考する。

3. 人間科学的コラボレーションの方法論

3-1. 学際的アプローチ

まず、人間科学的コラボレーションの方法として、学際的アプローチが挙げられよう。実際、人間科学は、「学際性」を売りにしてきた。例えば、根ヶ山 (2001) は『母性と父性の人間科学』のまえがきを、「母性・父性に対するこれらのさまざまな切り口・問題意識と方法、あるいは社会への提言の可能性を持つ学際的なものであることを教えてくれる。まさにそのことが『人間科学』という学問の目指すところにほかならないのである」という言葉で終えている。

このような例からもわかるように、学際的アプローチは、人間科学研究の代表的方法といえることから、ここで学際性について反省してみることは意味があろう。この点に関して、菅村と春木 (2001) の以下の提言は検討に値すると思われる。

学際性と言えば、聞こえはよいが、この概念は必ずしも明確でない。例えば、人間の発達というテーマについて、いくつかの分野の専門家が、それぞれの立場からアプローチするということはすでになされているが (see 比企, 1997 for a review), この場合、学問そのものに変化はなく、協力体制を作るにすぎず束論に近い (春木, 1988)。

ここで述べられているように、確かに学際的研究は束論を超えることは難しく、新たな領域の創造や問題解決にはつながりにくいという意味で限界がある。したがって、この提言からは、学際的研究は人間科学の目指すべき「到達点」ではないという示唆を汲み取ることができよう。

しかしながら、学際性の有用性までが否定されたものとして捉えるべきではないだろう。なぜなら、学際性を人間科学の第一義性に置くのではなく、数ある人間科学的意義の一つとして位置付ければ、それは依然として有効な枠組み

といえるからだ。すなわち、目的に応じて、学際性の意義を捉え直せば、人間的事象の立体的理解を目的とした際に、様々な領域の専門家が同じテーマに対してアプローチする学際的アプローチは、一つの有効なコラボレーションの方法であることは間違いないといえよう。

3-2. 学融的アプローチ

次に、人間科学的コラボレーションの方法として、モード論に基づく学融的アプローチを紹介する。モード論とは、個々の学問に個別の学範⁽²⁾を超えて、知的生産活動を規定するモードが存在していると考える科学社会的な考え方である (佐藤, 1998)。以下Gibbons (1994/1997) 等が論じたモード論を、心理学へと適用した佐藤 (1998) の議論を参考にしつつ、人間科学論へ展開していく。

モードとは、「知識生産の様式」のことであり、モードⅠとモードⅡという2つの様式がある。佐藤 (1998) によればこれらのモードは以下のようになる。

[モードⅠ] 研究の価値が学問体系への貢献により決定されるようなモード。(略) 学範 (ディシプリン) が明確な知識生産の様式であり、研究テーマの設定から専門職への就職までが学範 (ディシプリン) によって規定される。学問分野が一つのコミュニティ (共同体) をなしているものである。(略)

[モードⅡ] 社会に開放された知識生産のモード。取り組むべき研究テーマは現実の社会に起きた解決すべき課題として現れる。課題の設定ならびに解決は特定の学範 (ディシプリン) ではなく社会の要請によって規定される。そのため、複数の学問領域にまたがる多彩な人々のコラボレーション (協同作業) が行われやすい。(略)

ここでモードⅡとは、単なる「応用」を意味しないということに注意する必要がある (佐藤, 1998)。モード論では、知識生産一元論を取り、

「基礎/応用」といった二項対立は消滅している。すなわち、「モードⅠ的な知識生産とモードⅡ的な知識生産があるということであり、これらの知識生産はモードが異なるだけで序列関係にあると考えない」(佐藤, 1998) のである。

モードⅡにおいて、知識生産を基軸とすることにより、「基礎/応用」といった二項対立が消滅することからも、人間科学へ援用する意義はあるといえよう。さらに重要な点は、モードⅡの特徴である学融的な知識生産は学際的研究とは異なるという点である。この相違点について、佐藤 (1998) が簡潔にまとめているので引用してみよう。

学際的 (interdisciplinary) な研究は、ある課題に関して複数の学問分野が研究を行うことであるが、個々の課題はあくまで学範 (ディシプリン) 内の興味であることが多い。また、学際的研究の場合には1つの課題の異なる側面を複数の学問分野がそれぞれ担当するのであり、課題そのものについて共同で作業・検討することは少ないし、ある分野の成果に対して他の分野が異議をさしはさむことでよりよい成果を目指すようなことはほとんど無いと言ってよいであろう。学際的な研究では、問題は共有されているが、その後の作業の解は共有されなくてもよいのである。その一方学融的 (トランスディスプリナリー) 研究の場合は、問題の共有とともに、何よりも解の共有こそが重視される。

学融の人間科学的意義を述べるとすれば、「基礎/応用」の二項対立を解消できる点、さらには「学問のつぼ」である人間科学の特徴を活かし、社会に要請された問題解決に寄与できる可能性があることだろう。学際とは異なる学融というコラボレーションの方法は、「人間のための科学」を掲げる人間科学において、実践的枠組みとして活用されるべきだと考える。その際には、菅原と佐藤 (1996) の目撃証言の信憑性を巡る

法律学と心理学のコラボレーションが参考になるだろう。

また佐藤 (1998) の次の議論は、知見の汎化の観点から、興味深いので一部引用する。

解を得るためには既存の知識を利用しているとはいえ、その結果生み出されるものは独創的なものである。そして、解を得るために構築された枠組みは、元来は個別の問題解決の枠組みであっても、課題を共有する他のグループが出現した場合には土台になり、さらなる展開を容易にする。

特定の問題の解を得たグループが、同種の (あるいは近い) 課題に取り組み、新しいコラボレーションを始める時に、成果の普及が起きる。

(下線部は筆者が加筆した)

これは人間科学的知見の汎用化という意味でも重要な提言である。したがって、これを踏まえさらなる理論化を進める。具体的には、どのような工夫をすることにより、「さらなる展開を容易に」したり、「成果の普及」が起きやすいのかが明らかにしていく。したがって次にこの点を打開するために、西條 (2003a) の提起したアナロジーによる一般化の枠組みを概観しつつ理論化を進める。

3-3. アナロジー的思考に拠る一般化

アナロジーとは、既知のパターンには簡単には一致しないような未知の状況に直面した場合、新奇の事態をすでに知っていることがらに置き換えて理解しようとする時の心の飛躍のことである。アナロジーが機能するための原則は、既に認知科学の知見として明らかにされている (Holyoak & Thagard, 1995/1998)。

以下、人間が持っているアナロジーの原則に基づき、研究論文を一般化可能なテキストにすることにより、「成果の普及」を促進するための具体的方法を検討する。

第一に、アナロジーを行う妥当性を得るため

に「類似性の制約」を満たす必要がある。そのためには、知見を得るまでのプロセスを明示的に残すことが必要である。そして、数量的研究においては、方法部にデータ収集の状況等を、再現可能なように記載する必要がある。一方質的研究においては、十分に文脈を踏まえた状況を記述する「厚い記述」(Geertz, 1973/1987)が必要になるだろう。いずれにしても、読み手が、研究論文間の直接的な類似性を、十分に確認可能な程の豊かな情報を記述する必要がある。

第二に、「構造の制約」を満たすことが求められる。したがって、これは「構造」を方法論の中心概念に据える枠組みにおいて可能となることに注意しなければならない。また構造の制約を満たすためには、「ベース」といわれるなじみ深い領域と、「ターゲット」といわれる新たに理解しようとする領域の間に、一貫した構造上の相似関係を見出しやすいようにする必要がある(Holyoak & Thagard, 1995/1998)。具体的には、ベースとターゲット間のシステムレベルでの比較が行えるよう、知識を明示的に表象するのが有効である。特に構成された多くのアナロジーは図示されているという認知科学的知見(Holyoak & Thagard, 1995/1998)に注目すると、人間的現象を構造化したモデルを、できる限り明示的に図示することが求められるといえよう。

以上のように、論文を「類似性の制約」と「構造の制約」を満たすテキストにすることによって、学融的アプローチにおける問題解決の成果の普及や、さらなる展開を促進する学術的基盤が成立したといえよう。換言すれば、これにより、書き手と読み手の相互作用を基軸とした新たな一般化の枠組みが確立されたといえる。

3-4. アナロジー法

そして、このアナロジーに基づく一般化は、演繹法と帰納法の狭間に位置する「アナロジー法」とでもいうべき第三の思考形式といえることができる。アナロジー法によれば、異領域で明らかにされた知見を、積極的に活用することも

可能となる。例えば、自己組織化という現象は、複雑系の科学で明らかにされた知見であるが、これをアナログカルに援用することにより、母子関係が自己組織化することを示した研究(西條, 2002c)がそれに当たるだろう。

「学問のるつぼ」である人間科学において、このような領域を超えた知見の活かし方、思考形式が開発されたことにより、新たな人間科学の展開が期待できるといえよう。

4. トライアングレーションの問題点

さて、話題を学際・学融といったコラボレーションの方法に戻そう。本稿では以下、これらをトライアングレーション(triangulation)と総称し議論を進める。トライアングレーションとは「1つの現象に関する研究で複数の方法(または複数のデータ源、複数の理論、複数の研究者)を用いる」(Holloway & Wheeler, 1996/2000)というものである。

例えば、方法に焦点化したトライアングレーションとして、方法論的折衷主義が挙げられよう。これは例えば、数量的・質的アプローチの双方の利点を柔軟に組み合わせる方法論である。「質的データは質的データとして、数量的データは数量的データとしてそれぞれ最大限その長所を活用するしかたで結合し利用すべき」(やまだ, 1997)といった方法論的折衷主義とでもいうべき立場は、多くの研究者に支持されている(鹿毛, 2002; 佐藤, 2002; 子安, 2002)。そして、実際にそういったスタンスに基づく研究も行われている(杉浦, 2001; 矢守, 2001)。

また、学際的アプローチは、1つの研究に対して複数の領域の研究者がアプローチするだけでなく、1人の研究者が複数の観点から現象にアプローチすることもある(例えば、根ヶ山, 2002)。それに対して、学融的アプローチは、複数の領域の研究者により行われ、1つの問題解決に焦点化するアプローチといえる。

いずれにしても、上記のトライアングレーションという枠組みに包括され得ることがわか

るだろう。しかし、ここまで敢えて述べてこなかったが、これらのトライアンギュレーションには超えなければならない難問がある。通常、人間科学者は、方法論レベルの有用性や欠陥は知覚できるが、哲学的なレベルの有用性や欠陥を知覚することは苦手としているといえよう。したがって、これは方法論に反映された哲学的難問の好例だと思われるので、以下に西條(2003a)の議論を援用しつつ、トライアンギュレーションを巡る難問とその哲学的解明法について言及していこう。

Denzin(1989)は、トライアンギュレーションを、「データ」「研究者」「理論」「方法論」といった4つの代表的なタイプに分類している。しかし、ここでは、これらの分類は表面的なものに過ぎず、認識論内トライアンギュレーションと、認識論間トライアンギュレーションといった分類が重要な意味を持つことになる。そして、後者において、哲学的難問に起因する問題が立ち現れることになる。Flick(1995/2002)によれば、異なる認識論に依拠する質的・量的研究を組み合わせることによって、以下の3つの帰結に至る。

- (1) 質的結果と量的結果がひとつに収束し、互いに強め合い、同じ結論を支持する。
- (2) 両結果はひとつの対象（たとえば特定の病気の主観的意味と住民との間でのその分布）の異なった側面に焦点を当てるが、互いに補い合うもので、合わさることで全体像がはっきりする
- (3) 両結果は互いに異なり矛盾する。

(1)(2)の結果が得られた時には、問題は隠蔽されるものの、(3)のように相矛盾する結果が得られた場合に、問題が顕在化する。この場合、どちらの結果が妥当であるかは、どちらの認識論的前提を中軸に据えるかによって、決められることになる。これは、逆にいえば、どちらかの結果の妥当性を不当に低めることに他ならない。

これでは、異なる認識論に依拠して、人間科学的事実を立体的に捉えようとする認識論間トライアンギュレーションの有効性が、十分に発揮されずに終わってしまうだろう。これはデータ、研究者、理論、方法論のいずれを問わず、相容れない認識論に基づくトライアンギュレーションが抱える根本的な難問なのである。

このような指摘に対して、以下のようにその解決の糸口を「問題解決への焦点化」に求めることは可能だろう。

データのトライアンギュレーションは、方法の混合とは異なっている。トライアンギュレーションにおいて、研究者は同じ問題に異なった方法で、あるいは異なった見地からアプローチする。研究者が方法を混合する場合は、異なったアプローチ法を用いながら、1つの研究のなかで異なった研究問題をみている(Holloway & Wheeler, 1996/2000)。

これは学際的アプローチに対する、学融的アプローチの優位性の主張と重ねて見ることができる。しかしながら、この主張も難問の根本的な解決をもたらすものではない。なぜなら、異なる認識論的観点からアプローチした時に、結果的に1つの研究の中で異なった研究課題を見ってしまう可能性は、常に排除できないからだ。

1つの研究課題に対して異なった理論的見方を適用する理論的トライアンギュレーションは、使用頻度が低い(Holloway & Wheeler, 1996/2000)のは当然の帰結なのである。以上のことから、先に紹介したトライアンギュレーションの真価を発揮し、人間科学の存在意義を確立するためにも、認識論の問題を解決する必要があることがわかるだろう。

Holloway & Wheeler (1996/2000) が、融和論を踏まえながらも、「にもかかわらず、社会科学の実証主義的方法と解釈的方法は、対抗しかつ対立した思想がその根源にあるということを出さなければならない」と述べているよ

うに、異なる認識論に依拠した2つの方法論は、両者は相容れないものであり、相互に排他的なものである(Hammersley, 1992)ことを思い出す必要がある。相容れない認識論に依拠する方法論を、一つの研究において柔軟に折衷することは理論的に無理があるのである(菅村・春木, 2001)。

5. コラボレーションを機能させる構造構成主義

このような認識論間トライアンギュレーションにまつわる問題の背後には、相互に還元不可能なものをどのように統一するのかといった哲学的難問が横たわっている。これは「説明/理解」が、相互に還元不可能な異質なものであり、現状では両者は相容れない立場である(丸山, 2002; 岩崎, 2000)のと同じタイプの難問なのである。

実は、この難問を解明した人間科学考は既に存在する。西條(2002a)が構造主義科学論(1990)を通常の認識論の一段上位(下位でも可)に位置づく超認識論に位置付けることにより整備した認識論的基盤は、このような人間科学的コラボレーションを妨げる難問を解明する機能を備えている。そこでは、相互還元不可能性という難問と、包括可能性は別種の問題であることにまで原理的思考を徹底し、還元不可能なものを包括する認識論的基盤を確立した。

この認識論的基盤は、構造構成主義と名付けられ、それを支える核心的概念として「関心相関性」を組み込むことにより、さらなる理論化が進められた(西條, 2003a)。「関心相関性」とは、丁寧にいえば「身体・欲望・関心相関的観点」ということになり、これは身体・欲望・関心に応じて、そこから「世界」の^{ありかた}「存在」を受け取っている(竹田, 1995)という考え方である。すなわち、認識論の価値とは、いずれが絶対的に妥当といったことではなく、それらは関心と相関的に規定されるものなのである。したがって認識論は、研究の関心・目的に応じて、適切と思われるものが選択されることになる。

そして、構造構成主義はそれを可能とする理論的枠組みに他ならない。

次に、構造構成主義を西條(2002b)の再構築した人間科学へ援用することにより、その精緻化を試みる。従来の「方法論的折衷主義」は、認識論を考慮せずに「思い付いたまま色々な方法をテキトウに使ってみました」というものであったため、矛盾した結果が得られたときにはテキトウにお茶を濁すしか方法はなかった(西條, 2003a)。

しかし、構造構成主義を認識論的基盤とすることによって、研究目的に応じて、従来事象を認識する根底に位置付けられていた認識論をメタ理論的枠組みとして柔軟に選択可能となったといえる。すなわち、「心理的現象の曖昧な側面を捉えるために、戦略的に社会構築主義的なメタ理論的枠組みを採用し、心理的現象の確実な側面を捉えるために、戦略的に客観主義的なメタ理論的枠組みを採用する」といったように体系化された「認識論的多元主義」へと進化することを意味するといえよう。

例えば、ある心理的現象の曖昧な側面を捉えようとした時、現実とは社会的に構築されたものとして捉えるといった前提に基づく社会構築主義は、有効なメタ理論的枠組みとして機能し得るし、一方でその確実な側面を捉えようとした時、一つの外部的実在を仮定する客観主義は、有効なメタ理論的枠組みとして機能し得ることになる。

また、先述したようにアナロジーによる一般化に関して、アナロジー法は「構造の制約」を満たす必要がある。構造を中心概念とする構造構成主義は、アナロジー法が有効に機能する枠組みとなっていることがわかるだろう。

以上のことから、構造構成主義は、人間科学的コラボレーションを可能とするために有効な認識論的基盤となることがわかるだろう。逆に言えば、構造構成主義を超認識論に据えた認識論的基盤に依拠することによって初めて、上述してきた人間科学的コラボレーションの方法を

十全に機能させることができるのである。

また、構造構成主義という超認識論の有効性は、方法論レベルに留まるものではない。「学問のつぼ」である人間科学において、建設的なコラボレーションを行うためには、各研究者の心にも、関心相関性に基づく超認識論を確立し、自らの依拠する立場が、唯一絶対的なものではなく、数多く在る認識形式の一つであることを決して忘れてはならない(西條, 2002b, 2003b)。自らの身体・関心が固定されていると、自ずと研究法やその在り方の価値も固定されてしまうので、他の関心に基づく多様な価値に気付くことができなくなってしまうのである。関心相関性を基軸とする超認識論という観点を、常にメタな視点として堅持しておくことは、人間科学に携わるための必須の素養といっても過言ではないだろう。

6. 人間科学的知の体系化に向けて

次に、人間科学知の体系化を可能とするための理論化を進める。そのためには、従来の「知の在り方」を見定め、場合によっては、その変更を行う必要がある。なぜなら「知の在り方」が適切なものでないならば、人間科学の体系化は原理的に不可能になってしまうからだ。まず、従来の知の在り方を定めるにあたって、「在り方」、「存在」の意味を明確化していく。

竹田 (1995) によれば、『存在』とは、つまり、さまざまな『ある』という言葉で了解されているもののことである。そして、「存在」は、一般的＝客観的に規定される側面と同時に、関心相関的に規定される側面が同居している (竹田, 2001)。前者の、存在の客観的に規定される側面を、「存在的」といい、これは「その存在者の『何であるか』を事実関係として問題にする」視点のことである (竹田, 1995)。また後者の側面を「存在論的」といい、これは関心相関的に規定される視点のことである (竹田, 1995)。そして、「このような二様の存在規定の間の差異＝ズレを『存在論的差異』という」(竹

田, 2001) ののである。Heideggerは、「存在」の問いに対して、もっぱら「いかにあるか」を実証的、客観主義的に答えようとする伝統的な存在論を否定し、「存在的」ではなくて「存在論的に答えよ」と強調した (竹田, 2001)。これを「存在論的問いの優位」(竹田, 1995) という。すなわち原理的に、存在を問うためには、その関心により規定されるものとして存在論的に問う必要があるということである。その意味において「存在」は、記述し尽くすことはできないのである。

そして「事物の存在」は、ふつう客観的な存在と見なされており、それ故「それは何であるか」と問われうるが、「心的存在」は事物の存在とは、決定的な違いがあり、心的存在が何であるかということは、物的なものについていわれるのと同じ意味において経験することはできないのである (竹田, 1995)。つまり、心的な存在 (概念) は、実体がない故に、関心相関的に規定されるのである。例えば、ある人が死にそうな程喉が渇いていれば、単なる水たまりも、「飲み物」として、その人にとって重要な「価値」や「意味」といった心的概念としての存在として立ち現れるであろう。

これを踏まえた上で、「知の在り方」に話を戻そう。従来の客観主義的な「知の在り方」は、存在的なものとして問われており、それは我々と独立してどこかに実在している心的実体としての「知」のことであった。しかし、「知」とは心的な存在に他ならず、故に存在論的に問われるべきものである。換言すれば、知の在り方は関心に応じて、規定されるものなのである。

したがって、人間科学知の体系化を目的とするならば、それが可能となるように、存在論的に「知の在り方」を問い直さなければならないといえよう。したがって次に、「継承」という概念を拡張することにより、そのための理論化を進めていこう。

7. 継承対象の拡張

西條 (2002a) の提案した「継承」とは主にその対象を仮説に限定するものであった。これは実質的に機能する方法論的概念として意味のあるものであり、今後も活用が期待される。ここではそれに加え、「対象・テーマ・認識論・方法論・理論・概念」等研究を構成する様々な要素を継承対象として捉えることを提案したい。それによって、様々な領域・立場における各研究 (論文) が、ネットワーク状に連結していくものとして捉えることを可能とするのである。

それぞれの研究を知のネットワークに位置づけて捉えることによって、人間科学を、到達すべき客観的実在を仮定せずに、ローカルな知識に基づきつつも一つの知を構成可能な、統一学問として捉えることが可能となる。換言すれば、これは人間科学知を、神経細胞と脳のアナロジーにおいて存在論的に規定しようという試みでもある。

この継承対象の拡張に関して、「継承対象の拡張を提唱したところで、実際にそれを本文中に明記することは困難ではないか?」といった疑問に答えておく必要がある。確かに、従来の研究でも、序論や問題において、その研究と関連する「対象・認識論・方法論・理論・概念」については言及されてきたであろうし、継承対象の拡張を唱えたところで、従来の慣例に逆らい、実際に論文にそれらを明記することは困難かもしれない。

しかし、先述したように、ここの狙いは、具体的な方法論的枠組みとして有効に機能するというよりは、むしろ人間科学知の体系化が可能となるように、各研究者の人間科学知の捉え方・体験の仕方を変更することにある。これにより各領域やテーマを超えた人間科学知を構築するためのイメージを持つことができれば、継承対象の拡張の目標は達成できたといえるだろう。

8. グランドセオリーのスケッチ

以上の議論により、人間科学的知を体系化する理論的基盤が整ったといえる。ここで人間の事象を統一的に説明可能な、グランドセオリーのイメージをスケッチしておくことは意味のあることだろう。創発するグランドセオリーとは、従来のような平面的なイメージで捉えられるスタティックな理論ではなく、アナログカルに言うならば、ニューラルネットワークを基礎とした人間の脳のシステム、すなわち「立体的かつ動的に組織化される理論」として捉えられるだろう。

人間の脳が、何を目的としてどのような活動をするかによって、活性化する脳の部位が異なってくるように、グランドセオリーとは対象とする人間的事象によって、そのネットワークの特定の部位が説明したり、複数の部位が複合的に説明したりするといった動的に組織化され続ける生きたシステムとして、その姿を現す可能性が期待される。人間科学知を動的ネットワークとして存在論的に規定することによって、現段階においてもグランドセオリーは創発可能な段階にあるのかもしれない。

9. おわりに：人間科学の哲学の意義

本稿では、人間科学的コラボレーションの方法論を提示した上で、その問題点の解明を行い、人間科学知の体系化に向けた理論化を進めてきた。今後も、人間科学的コラボレーション法を洗練し、それを通じて人間科学的研究を実践していく必要がある。

最後に、筆者の経験からも、科学者が哲学の意義を理解することは難しいと考えられるため、人間科学の哲学の意義の再考を通じて、本稿の意義を確認しよう。

Wittgenstein (1977/1995) が、「建て物を建てることは私の興味を惹かない。私に興味があるのは、考えうる様々な建物の基礎を透視することである。したがって私の目的は科学者たちの

目的とは違ったものであり、私の思考の動きは科学者達の思考の動きとは異なっている」と述べているように、それらの営為は全く異質のものなのである。

科学と哲学の関係をより分かりやすく伝えるため、明治維新時の、長州と薩摩のアナロジーで説明してみよう。双方とも軍隊を組織し、武器生産を重ねて、戦力を増強した。科学的営為は、ちょうどこの武器の生産に該当するといえる。すなわち、科学は通常「生み出すこと」に従事しているのである。しかしながら一方で、長州と薩摩は双方とも偏狭な視野に囚われ、戦争し、消耗し続けていた。いくら武器生産しても、内部で足を引っ張りあっているのは、日本の国力は充実することなく、外国に侵略されてしまう。そこで坂本竜馬は、言葉を尽くし、より高き志を説くことで双方を和解させた。哲学的営為は、ちょうどこの竜馬の仕事に該当するといえよう。すなわち、哲学とは、難問による停滞や消耗を、コトバを尽くして解きほぐすという営為に他ならない。

したがって、科学者が自らの土俵から、哲学的営為に基づく研究に対し、「思弁的」「観念的」「お話に過ぎない」といった批判⁽¹⁾をしても意味がないことになる。それでもなお、「人間科学者は、科学をやらなければならない、故に哲学は人間科学に必要な」という意見もありえよう。

しかしながら、吉岡（1989）が人間科学のあるべき姿を論じる中で、「サイエンスが方向性を見失ったときに学問をリードするのは哲学である」ため、「哲学の役割は特に重要である」と鋭く指摘するように、科学的営為だけでは「全体としての科学」の進展は望めないことに気付く必要がある。

科学と哲学は車の両輪のようなものであり、人間科学という高き志に向って走るためには、どちらも不可欠なのである。

脚 注

- (1) モダニズムとは、要素還元主義、機械論的

世界観に基づく思潮であり、ポストモダニズムとは、文字通りモダニズムの“post-”、つまり「後」にきた思潮である（菅村・春木、2001）。そして前者の代表的認識論は「外部に一つの実在がある」とする客観主義の立場であり、後者の代表的認識論は「現実社会的に構築される」とする社会構築主義ということができる（西條、2003c）。

- (2) disciplineの訳：学問体系内の規範・了解されたルールのこと。
- (3) 最も実際には原理的思考に基づく良き哲学（竹田、2001）ばかりではなく、過度に装飾されたコトバによって、牙城を築き、わざわざ事態をやこしくするようなヘンな哲学もある（読み手の理解不足からそう見えてしまう場合もあるが）。したがって、このような批判をしたくなる気持ちもわからないでもない。しかしそれは科学的営為にも良質のものと悪質のものがある点で同じであり、悪質なものだけをみて、哲学に意味がないと思うのは早計だろう。

文 献

- Carrel, A. (1994). 人間この未知なるもの. (渡部昇一, 訳). 東京: 三笠書房. (Carrel, A. (1935). *Man, the unknown*. New York: Harper and Bros.)
- Denzin, N. K. (1989). *The research act: A theoretical introduction to sociological methods*(3rd ed.). Englewood Cliffs, N.J.: Prentice Hall.
- Flick, U. (2002). 質的研究入門: <人間科学>のための方法論. (小田博志, 山本則子, 春日常, 宮地尚子, 訳). 東京: 春秋社. (Flick, U. (1995). *Qualitative forschung*. Reinbek bei Hamburg: Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH.)
- Gibbons, M., Limoges, C., Nowotny, H., Schwartzman, S., Scott, P., & Trow, M. (1997). 現代社会と知の創造: モード論とは

- 何か. (小林 信一(監訳). 東京:丸善. (Gibbons, M., Limoges, C., Nowotny, H., Schwartz, S., Scott, P., & Trow, M. (1994). The new production of knowledge: The dynamics of science and research in contemporary society. Thousand Oak CA: Sag.)
- Geertz, C. (1987). 文化の解釈学. 1. (吉田 慎吾, 柳川啓一, 中牧弘允, 板橋作美, 訳). 東京:岩波書店. (Geertz, C. (1973). The interpretation of cultures. New York: Basic Books.)
- Geertz, C. (1987). 文化の解釈学. 2. (吉田 慎吾, 柳川啓一, 中牧弘允, 板橋作美, 訳). 東京:岩波書店. (Geertz, C. (1973). The interpretation of cultures. New York: Basic Books.)
- 濱口晴彦(1988). 人間科学的状況の人間科学化「人間科学を考えるシリーズ②」. ヒューマンサイエンス, 1(2), 77-85.
- Hammersley, M. (1992). What's wrong with ethnography?. London: Routledge.
- 春木豊(1988). 人間科学への態度「人間科学を考えるシリーズ①」. ヒューマンサイエンス, 1(1), 3-10.
- 比企静雄(1997). 人間科学が呼び起こす研究分野. 「人間科学を考えるシリーズ⑱」. ヒューマンサイエンス, 10(1), 25-26.
- Holloway, I., & Wheeler, S. (2000). ナースのための質的研究入門: 研究方法から論文作成まで. (野口美和子, 監訳). 東京:医学書院. (Holloway, I., & Wheeler, S. (1996). Qualitative research for nurses. Malden: Blackwell Science Ltd.)
- Holyoak, K. J., & Thagard, P. (1998). アナロジーの力: 認知科学の新しい探究. (鈴木宏昭・河原哲雄, 監訳) 東京:新曜社 (Holyoak, K. J., & Thagard, P. (1995). Mental leaps: Analogy in Creative Thought. London: MIT.)
- 池田清彦(1990). 構造主義科学論の冒険. 東京:毎日新聞社.
- 岩崎康男(2000). 心理学における理論構築を巡る問題について. 理論心理学研究, 2, 33-37.
- 鹿毛雅治(2002). フィールドに関わる「研究者/私」: 実践心理学の可能性. 下山晴彦・子安増生(編) 心理学の新しいかたち: 方法への意識(pp. 132-172). 東京:誠信書房.
- 子安増生(2002). 心理学研究における二項対立を超えて. 下山晴彦・子安増生(編) 心理学の新しいかたち: 方法への意識(pp. 213-255). 東京:誠信書房.
- 丸山高司(2002). 人間科学の方法論争. 渡辺恒夫・村田純一(編著) 心理学の哲学(pp. 59-76) 京都:北大路書房.
- 根ヶ山光一(2001). 前書き. 根ヶ山光一(編著) 母性と父性の人間科学(pp. iii-vi) 東京:コロナ社.
- 根ヶ山光一(2002). 発達行動学の視座. 東京:金子書房.
- 野嶋栄一郎(1997). システム理論と人間科学, 「人間科学を考えるシリーズ⑰」. ヒューマンサイエンス, 9(2), 1-9.
- 西條剛央(2001). 縦断研究のための土壌創り: 「縦断研究法」の体系化に向けて 発達心理学研究, 12, 242-244.
- 西條剛央(2002a). 生死の境界と「自然・天気・季節」の語り: 「仮説継承型ライフストーリー研究」のモデル提示. 質的心理学研究, 1, 55-69.
- 西條剛央(2002b). 人間科学の再構築 I: 人間科学の危機. ヒューマンサイエンスリサーチ, 11, 175-194.
- 西條剛央(2002c). 母子間の「横抱き」から「縦抱き」への移行に関する縦断的研究: ダイナミックシステムズアプローチの適用. 発達心理学研究, 13, 97-108.
- 西條剛央(2003a). 「構造構成的質的心理学」の構築: モデル構成的現場心理学の発展的継承. 質的心理学研究, 2, 164-186.

- 西條剛央 (2003b). 人間科学の再構築Ⅱ:「人間科学の考え方」再考. 人間科学研究, 16, 129-146.
- 佐藤達哉 (1998). 進展する「心理学と社会の関係」モード論からみた心理学:心理学論 (へ)の挑戦 (3). 人文学報, 288, 153-177.
- 佐藤達哉 (2002). モードⅡ・現場心理学・質的研究:心理学にとっての起爆力. 下山晴彦・子安増生(編) 心理学の新しいかたち:方法への意識(pp. 173-212). 東京:誠信書房.
- Smith, L. B., & Thelen, E. (1993). (Eds.) A dynamic systems approach to development: Applications. Cambridge: MIT Press.
- 菅村玄二・春木豊(2001). 人間科学のメタ理論. ヒューマンサイエンスリサーチ, 10, 287-299.
- 菅原郁夫・佐藤達哉(編) (1996). 目撃者の証言:法律学と心理学の架け橋 東京:至文堂.
- 杉浦淳吉(2001). ゴミ分別収集がはじまるとき. やまだようこ・サトウタツヤ・南博文(編) カタログ現場心理学(pp. 64-71). 東京:金子書房.
- 鈴木晶夫(1996). 「人間科学」のイメージ調査「人間科学を考えるシリーズ⑩」. ヒューマンサイエンス, 8(2), 1-7.
- 鈴木平(2002a). 身体心理学の将来:人間科学としての複雑系と身体性の復権 春木豊(編著). 身体心理学の探究(pp. 295-311) 東京:川島書店.
- 鈴木平 (2002b). 動作と気分状態の関連性. 早稲田大学大学院人間科学研究科博士論文.
- 鈴木平・春木豊 (2001). 身体動作と気分状態の相関関係について 平成10-11年度文部省科学研究費補助金(基盤研究C(2)) 身体動作と呼吸, 気分状態の関連性に関する研究(課題番号10610086) 研究成果報告書 pp. 13-30.
- 竹田青嗣 (1989). 現象学入門. 東京:NHKブックス.
- 竹田青嗣(1995). ハイデガー入門. 東京:講談社.
- 竹田青嗣(2001). 言語論的思考へ:脱構築と現象学. 東京:径書房.
- Thelen, E., & Smith, L. B. (1994). A dynamic systems approach to the development of cognition and action. Cambridge: MIT Press.
- Thelen, E., & Smith, L. B. (1998). Dynamic systems theories. In R. M. Lerner (Ed.), Handbook of child psychology: Vol. 1 (pp. 563-634). New York: John Wiley & Sons.
- Wittgenstein, L. (1995). 反哲学的断章. (丘 沢 静 也, 訳). 東京:青土社. (Wittgenstein, L. (1977). Vermischte Bemerkungen. Frankfurt: Suhrkamp Verlag.)
- やまだようこ (1997). モデル構成をめざす現場心理学の方法論. やまだようこ(編) 現場心理学の発想(pp. 161-186). 東京:新曜社.
- 矢守克也 (2001). 災害体験の記憶と伝達. やまだようこ・サトウタツヤ・南博文(編), カタログ現場心理学(pp. 112-119). 東京:金子書房.
- 吉岡亨(1989). ブレインとマインドーそのミクロな社会ー「人間科学を考えるシリーズ③」. ヒューマンサイエンス, 2(1), 66-72.

[2003年5月14日受理]

付 記

指導教授の根ヶ山光一先生をはじめ、筆者が人間科学的研究に邁進する姿勢を支持し、見守って下さった全ての方々、ここに記して感謝いたします。

また本稿執筆にあたり、次世代人間科学研究会のメーリングリストの皆様から有益な刺激を与えて頂きましたことに、心から感謝致します。

Reconstruction of Human Sciences :

III. Methodology of Collaboration and Philosophy in Human Sciences

Takeo Saijo

Abstract

The purpose of this study was to consider way to collaborate in human sciences to overcome a crisis in this area. Firstly, previous issues and the recent progress in human sciences were briefly reviewed. Secondly, the methodology and the problems of collaboration in human sciences were suggested. Thirdly, the appropriate epistemology for the collaboration in human sciences was discussed. Fourthly, foundations of systematization of knowledge in human sciences were suggested. Finally, significance of the philosophy of human sciences was pointed out.

Key words : philosophy of human sciences, structural constructivism, triangulation, transdisciplinary, generalization based on analogy, methodology of collaboration.

•Graduate School of Human Sciences, Waseda University; Research Fellowships of the Japan Society for the Promotion of Science.